

白氏文集 二十二 官牛

加藤 淳平

こは、時の政治を大膽に諷諭する詩なり。諷せられたるは、新樂府論の書かれたる頃、唐の右丞相、即ち日本の右大臣に相當する職にありし政治家にして、世評芳しからざる人なりしとなむ傳ふる。白樂天三十代後半の、皇帝側近の少壯官僚として、使命感に燃えたる時期の詩なれど、現に右丞相の要職にある人を諷諭するは、些か暴勇の域に入ると言ひつべし。尤も丞相の職に新任せらるれば、其の宮中への出勤の便宜の爲、私邸より宮中に向ふ道路を舗装するは、當時の常習にして、非難すべきことに非ず。されば詩人は、此の人の、要職に伴ふ便宜を受くるも、それに見合ふ成果を擧ぐることに無きを、暗に批判せるならむ。但し政治家に、「陰陽を調ふ」る、即ち天地の陰陽の氣を均衡せしめ、自然災害等の世を苦しむる無きを期待するは、現代の我らに違和感の存する所ならずや。

官牛 諷執政也 官牛 執政を諷する也

官牛官牛駕官車 官牛 官車に駕し

澆水岸邊般載沙 澆水の岸邊より 沙を般載す

一石沙 一石の沙

幾斤重 幾斤の重さぞ

朝載暮載將何用 朝に載せ暮に載せ 將に何に用ゐんとす

載向五門官道西 載せて向ふは 五門の官道の西

綠槐陰下舖沙堤 綠槐の陰下に 沙堤を舖く

昨來新拜右丞相 昨來新たに拜す 右丞相

恐怕泥塗汗馬蹄 泥塗の馬蹄を汗さんことを恐怕る

右丞相 右丞相

馬蹄踏沙雖淨潔 馬蹄沙を踏み 淨潔なりと雖も

牛領牽車欲流血 牛の領は車を牽き 血を流さんと欲す

右丞相 右丞相

但能濟人治國調陰陽 但能く人を濟ひ 國を治め 陰陽を調ふれば

官牛領穿亦無防 官牛の領穿つも 亦防げ無からん

(大意) 官牛よ、官牛よ、官の車につながれて、澆水の岸邊から砂を載せて運んでゐる。一石の砂であれば、どれだけの重さだらうか。朝から晩まで運ぶ砂は、一體何に使ふのだらうか。砂を載せた車が向かふのは、都の五門から續く大通りの西であり、綠の槐の木陰の舗装道路を 砂利で舗装するのだ。昨日から新しく右大臣が任命された。泥の道のままでは、馬の蹄が汚れることを心配して、新大臣の私邸から宮中の向ふ道路を舗装してゐるのである。右大臣よ、馬の蹄は砂利で舗装した道を走り、汚れず清潔なままだとしても、重い車を牽く牛の頸は血を流さうとしてゐる。右大臣よ、さうは言つても、貴方が職務に勵み、困窮した人たちを救ひ、國の政治をきちんと運営して、自然災害への對應に萬全を期すことができるならば、官牛の頸に穴が空くくらゐのことは、致し方無いことだらう。

(平成二十九年十月十日受附)